最新の学説による敦煌へのいざない

森部　豊

柴剣虹・栄新江主編／栄新江著／高田時雄監訳／西村陽子訳
敦煌の民族と東西交流

A5判　264頁
東方書店
[2520円]

敦煌――この言葉は今の日本人にどのようなイメージをあたえるのだろうか。「シルクロード」上にかつて繁栄した交易都市。世界遺産である敦煌の莫高窟がある仏教の聖地。沙漠の中に浮かんだオアシス。あるいは、敦煌という名前すら知らず、かりに名は知っていたとしても、どこに存在するのかは定かでないという人もいるかもしれない（本誌の読者にはいないと思うが）。

ところで、日本語で書かれた敦煌の本といえば、今でも井上靖の『敦煌』を思い浮かべるのだろうか。ただし、これは小説であり、敦煌の歴史や文化を概観したものとはいえない。敦煌の歴史や文化を総合的にあつかった書籍は、専門家や熱烈な敦煌ファン以外では有名ではないかもしれないが、いくつかある。たとえば、かなり専門的だが、『講座敦煌』全九巻（大東出版社、一九八〇～一九九二年）があり、敦煌の歴史・文化・言語・地理・資料解題などをあつかっている。一般向けでは、長澤和俊『敦煌』（筑摩書房、一九六五年。加筆のうえ徳間文庫、一九八四年）があり、敦煌の莫高窟で発見された古い時代の文書のエピソードから始まり、漢代における敦煌郡の設置、この地での仏教の開花、敦煌をめぐる諸勢力の興亡を描いている。また關尾史郎・玄幸子『敦煌への道』（新潟日報事業社、二〇〇二年）は小冊子ながら平易な語り口で敦煌の歴史・文化へ我々をいざなってくれる。

それらに対し、今次、東方書店から出版された栄新江『敦煌の民族と東西交流』は、本場、中国の敦煌学の専門家が著わした敦煌の歴史・文化の啓蒙書であり、現代の中国における最新の敦煌研究の成果が凝縮されている。原書（中国語版）の題名は『華戎交匯―敦煌民族与中西交通』（甘粛教育出版社、二〇〇八年）といい、柴剣虹氏（もと中華書局の「編審」）と栄

新江氏とが編者となって出版した「走近敦煌叢書」の一冊である。著者の栄新江氏は、現在、北京大学歴史系の教授で、専門は非常に多岐にわたるが、評者の独断で紹介すれば、東西文化交流史をベースとした東ユーラシア史といえよう。現在、中国国内外で、当該分野や周辺学問領域に対して最も大きな影響を与えている研究者の一人である。

『東方』三八四号（二〇一三年二月号）によれば、すでに本書は売上ベストテン（No.1！）に入っており、本誌読者の多くはすでに購入しているかもしれないが、まずは本書の構成に沿って内容をごく簡単に紹介していきたい。

「はじめに」で、敦煌を通じて東西文化の交流を描くという栄新江氏自身の目標が述べられた後、「一　月氏―古代敦煌の白人種」では、前漢の武帝の時代（在位　前一四一～前八七）以前の敦煌の歴史から話がはじまる。中華王朝が敦煌をふくむ河西地域を実効支配する以前、この地には月氏という種族が居住していた。月氏は、張騫が使者として赴いた紀元前一三九年頃にはすでに中央アジアへ移動していたが、なぜ月氏は西方へ移住せざるを得なくなったのか、月氏とはどのような種族であったのか、文字記録以前の月氏は敦煌に在って、中国本土とどのような関係にあったのか。これらの問題を解き明かしながら、前漢武帝以前の敦煌という空間の歴史的役割を明らかにしている。

つづいて「二　玉門関と懸泉置―漢代の関城と宿駅」では、前漢王朝（前二〇二～後八）がいわゆる河西四郡を置き、敦煌を含む河西地域を実効支配し、中国本土と西方の地域を結ぶ駅道が整備されていく様を、出土資料の木簡を利用しつつ明らかにする。そして、いわゆる「シルクロード」上に敦煌を位置づけ、ここが東西の交易ルートの結節点として繁栄し、さまざまな種族が融合する場であることを描き出していく。

「三　仏教東漸―敦煌の仏教都市空間」では、漢・西晋・南北朝・隋唐時代の中国本土の歴史を概観しつつ、さらに中央アジアで新たに発見された古代の仏教経典の写本の情報を取り入れ、敦煌における仏教の流入（栄新江氏は後漢中晩期と推測）とその発展の様相が描き出されていく。

「四　ソグド商胡と敦煌の胡人聚落」では、敦煌およびその周辺の地域に移住して聚落を形成し、シルクロード上で国際商人として活躍したソグド商人の様相が、彼らが残したソグド語による書簡や敦煌で発見された文書史料の解読を通じて明らかにされていく。

安史の乱（七五五～七六三）以降、敦煌は唐朝の支配を離れ、吐蕃の支配下におかれるが、「五　吐蕃の敦煌統治とチベット文化の貢献」では、この吐蕃による敦煌支配時期（七八六頃～八四八）の様子が、主に仏教という視点から語られる。

吐蕃による敦煌支配は、八四八年に敦煌の土豪の張議潮の蜂起により終わりをつげ、やがてこの張議潮が敦煌を中心に地方政権をうちたてる。張議潮は八五一年に唐朝から節度使の地位を授かり、また「帰義軍」の軍額があたえられた。張氏の後、曹氏によってこのポストは受け継がれ、曹氏一族が一一世紀に西夏の支配下にはいるまで敦煌の地を支配した。「六　帰義軍時期のシルクロード」は、この時期の敦煌の歴史、仏教文化、そして張氏・曹氏と莫高窟の関係が述べられていく。

敦煌の帰義軍政権があったころ、現在の新疆ウイグル自治区のトルファンを拠点とした西ウイグル王国（九世紀中葉～一三世紀初にモンゴルの支配下へ）と甘粛省張掖を拠点とした甘州ウイグル王国（八九〇年代～一〇二八年）とがあった。この両王国は敦煌の帰義軍政権と時には対立し、時には交易による経済的結びつきがみられた。「七　ウイグルと敦煌」では、この両ウイグル王国と敦煌の帰義軍政権との歴史をヴィヴィッドに描き出している。

一方、タリム盆地の南縁には、コータン王国（九世紀中葉～一〇〇六年頃）が存在していた。漢文では「于闐」と記される。このコータン国の王家は帰義軍の曹氏と婚姻関係を結び、仏教を外交手段として利用し、中原王朝に使節を派遣し冊封を受けている。コータン王国は、敦煌に多くのコータン人を派遣し、そのコータン人が敦煌の漢人やその他の人々と交流していたが、そのコータンを通じ、仏教文化が敦煌に流入していった。「八　于闐と沙州」では、その様相が鮮やかに描か

れる。

以上が、本書のごく簡単な紹介である。本書の特徴として挙げられるのは、第一に、全八章のそれぞれがテーマごとに時代順に配列されているものの、各章が独立した読み物にもなっており、読者は自分の興味あるテーマのところから読んでいっても楽しめるオムニバス形式であることだ。また各章のストーリーは、『史記』『漢書』などの伝統的な編纂史料のみならず、敦煌を中心に甘粛省や新疆ウイグル自治区で発見された木簡、石碑、出土文書など最新のデータを利用して描かれている点に第二の特徴がある。そして第三の特徴は、本書全体の話が通説による概説という域を超え、随所に栄新江という現代の中国を代表する東西文化交流史の碩学による独特な見解がちりばめられている点にある。といっても、専門家以外の一般の読者にとっては、栄新江氏による独特かつ斬新な見解などどうでもいいことかもしれない。その点、現代中国の気鋭な研究者が、敦煌を中心とした東西文化交流の歴史をどのようにとらえているのか、というところを素直に楽しめばいいだろう。

本書を日本人による類書と比較した時、少し異なる点として、二〇世紀はじめの敦煌文書発見の経緯が省かれていることと、西夏支配時期（一一～一三世紀）以降の歴史がまったく記述されないということの二点があげられる。といっても、長澤氏の概説書にしても、西夏支配時期以降の記述は微々たるものだが。評者は、以前から、西夏以降、二〇世紀にいたる敦煌がどのような歴史をたどったのかという点が気になっていたのだが、残念ながら、この点は本書によっても明らかにはならなかった。

次に、日本語版の特徴をのべておきたい。日本語版には監訳者（あるいは翻訳者）の「あとがき」や「解説」など、いっさいないので、どのような経緯と目的をもって本書が刊行されたのかは全く不明である。ただ、中国語版とつきあわせて読んでいくと、日本語版は、良くも悪くも中国語版をほぼ忠実に「コピー」した訳書といえそうだ。日本語版で使用している図版も中国語版とすべて同じで、追加しているものはない。ただ、大きさが違う。そのため、著者が壁画にもとづいて説明している箇所で、日本語版の当該壁画写真が小さくなっていると、その解説がよくわからないという事態が生じている。一方、日本語版には各章の各節の中にも小見出しをもうけているので、この点、内容を把握するには便利である。

ところで、評者が思うに、おそらく日本語版の読者は、敦煌学や中国史、東ユーラシア史などの専門家だけでなく、中高等教育の教員や大学生、そして敦煌に興味を持つ一般の人もいることだろう。その点において、日本語版の出版に際しては、日本人向けのわかりやすい関連地図、敦煌周辺の詳細な地図は欲しかった。年表がないのも残念だ。特に五章から八章にかけては、年代が重複しており、自分で細かなメモを取らないと、時間の中に迷いこんでしまう。また、帰義軍節度使をはじめとする登場人物の家系図もあったほうが便利であっただろう。

また、補注や語釈などがあってもいい。確かに、一部の箇所で地名を説明していたりするが、例えば本書が引用する敦煌文書で「S.xxxx」「P.xxxx」と記されていても、専門家以外の一般の読者には、何のことはわからない人もいるだろう。また「俄蔵敦煌文書」（二三五頁）とあるが、これを「ロシア所蔵の敦煌文書」と読める一般読者はほとんどいないと思う。一方、一般読者に対する配慮として、中国語版で引用されている漢文史料を現代日本語に訳してあって、非常にありがたい。しかし、一部、翻訳されていない史料もある。再版のおりには翻訳していただきたいところである。

このように日本語版は、中国語版のスタイルをほとんど崩さず、かつ難解な敦煌文書をはじめとする史料にも丁寧な日本語訳を付した労作であるが、その一方、編集部を介して出版した書籍であるにもかかわらず、誤字・脱字・衍字・誤ったルビなどが多いのが残念だ。単純な校正ミスもあり、再版に際しては徹底的に見直したほうがいいだろう。誤訳や不適当・不適切な訳語もみられる。たとえば本書で「百姓」（一六二頁・一七六頁・一七八頁・一九二頁など）という表現が散見されるが、ここは「人々」とか「民衆」と訳すべき。日本語の「百姓」は農民の意味になってしまう。また、「城」（一四二頁・一七九頁など）という表現も、日本語としては紛らわしい。「都市」と訳していいのではないだろうか。「敦煌莫高窟第六一窟、すなわち曹議金父子が開鑿した功徳窟……」（一九七頁）は「……曹議金の子、曹元忠が開鑿した……」の誤り。「後晋の官告国信使」（一九九頁）は「旌節官告国信使」が正しい、などなど。

最後に、本シリーズ（『走近敦煌叢書』）は中国では全一〇作品が出版されているが、日本ではそのうち高啓安『敦煌の飲食文化』（原題『旨酒羔羊―敦煌的飲食文化』）と郝春文『敦煌遺書（邦訳仮題）』（原題『石室写経―敦煌遺書』）の二書の邦訳出版が計画されていると聞く。願わくは、訳者や編集部においては今回指摘した点を汲んでいただき、中国語で原書を読む機会のほとんどない日本の一般読者に対し（もちろん専門家にも対し）、よりよい形での翻訳を提供していただきたい。

【付記】本書評の作成にあたり、大阪大学大学院の赤木崇敏助教の協力を得ました。ここに謝意を表します。

（もりべ・ゆたか　関西大学）